

百寿記念 入江一子 自選展

世界の果てまで見てみたい
——シルクロードに拵ぐ

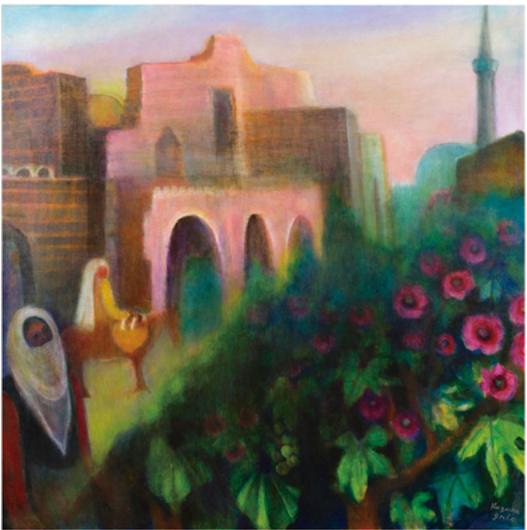
武田厚

シルクロードを描く、という仕事がライフワークのように印象づけられるのが今年100歳を迎える洋画家の入江一子である。大方のシルクロード作品は200号という大作で、女流画家協会展や独立展の壁を飾り、度々の個展においても絶えず発表されてきた。そのエネルギーの持続性については常識を超えてい見えるものであり、その熱情の純正さや発露のあり方においても飛びぬけて希少な画家のように見受けられる。

70年を優に超える画業の内の過半の年月をかけて積み上げてきたシルクロードという主題とのかけがえのない心の交流は、多分画家自身の生きていく指標のようなものをより明確化し、その意義の深さや豊かさを可能とするための大きな栄養素となつていったような気がする。結果として

描かれてきた作品の数々は、画家の日々の暮らしの証としての記録でもあります。そのシルクロードと通わせた心の構成が一貫していて、まさに不惑で責任のある画面を作り上げている、と私は常々思っている。とりわけその構成に見る特異性については、天真のもの、としかいようのないほど爽やかな爛漫性、という資質を失すことなく今も保つているところが興味深い。

入江一子は、シルクロードゆかりの国々をこれまで数々訪ねてきた。東西のアジアやヨーロッパなどその領域も広い。そうして訪ねた国々、町々、村々の人々と暮らしの中で知り得た様々な風物、風土、文化が、いかに



「花咲くチエスメ (トルコ)」1980年 60号S



「イスタンブルの朝焼け」2016年 20号F



「花のコーラス」1996年 30号F

も自由に、そして奔放に画面という空間に定着されているように見受けれる。実際には相当な時間の中での思索と試作を重ねてたどり着いたそれがそのままの表現のよう。とはいっても、画家自身の空間も時

い。がうまく調和されて作り上げられた新世界であろうことも理解できる。大事なことは、それらのすべてが入江一子という画家の感性を通して作られた独自の「シルクロードの今」というリアリティを示すものであるといふことではないだろうか。

世界の果てまで見てみたい、と入江一子自身が述べている。大陸育ちの入江一子の感性には独特の大陸的

在していたとも思われる。シルクロードという大きな時空へと誘われる要因やきっかけは様々あつたようだが、そのスケールの大きさをものとせず、絵画という自らの心身に取り込んできたのも、やはり大陸育ち故なのだろうか、と思うたりもする。

100歳記念の自選展である。驚きである。入江一子がどんな自分を選ぶのか興味津々。

(たけだ・あつし／美術評論家)

【東京展】
10月26日水～11月1日火
日本橋三越本店 6階 美術特選画廊
名古屋市中区栄2-1-1
TEL 052(3241)333-1
□ OGUENOUNOU 1111
いりえ、かずこ

山口県出身。1938年女子美術専門学校(現女子美術大学)卒。林に師事。47年女流画家協会会員。53年日本橋三越、名古屋三越、独立展。57年独立美術協会会員。92年芸能功労賞。色彩自在二三言語! 他画集4冊。2000年「色彩自在二三言語!」上・記念開館。03年「YOKO INUI シルクロード」にて個展。12年NY凱旋記念展。13年女子美術賞。賞賛。日本交響曲(NYリバーサイド美術館)。安政賞候補展。日本文流合同展。国際女流美術家クラブ展。バリ近代理術等出品。セントラル美術館他個展多数。現在独立美術協会会員。女流画家協会委員。入江一子シルクロード記念館館長。



「雲南ジンボー族まつりの日」2015年 200号P

描かれてきた作品の数々は、画家の日々の暮らしの証としての記録でもあります。そのシルクロードと通わせた心の構成が一貫していて、まさに不惑で責任のある画面を作り上げている、と私は常々思っている。とりわけその構成に見る特異性については、天真のもの、としかいようのないほど爽やかな爛漫性、という資質を失すことなく今も保つているところが興味深い。

作風は極めて鮮やかな色彩のものが多く、その色調のユニークさもよく知られるところだ。また、造形的にシルクロードを描く、という仕事がライフワークのように印象づけられるのが今年100歳を迎える洋画家の入江一子である。大方のシルクロード作品は200号という大作で、女流画家協会展や独立展の壁を飾り、度々の個展においても絶えず発表されてきた。そのエネルギーの持続性については常識を超えてい見えるものであり、その熱情の純正さや発露のあり方においても飛びぬけて希少な画家のように見受けられる。

70年を優に超える画業の内の過半の年月をかけて積み上げてきたシルクロードという主題とのかけがえのない心の交流は、多分画家自身の生きていく指標のようなものをより明確化し、その意義の深さや豊かさを可能とするための大きな栄養素となつていったような気がする。結果として